



内陸性気候はなぜ雨が少なく、気温の差が大きいのか

内陸は暖まりやすく、冷めやすいから

内陸性気候は大陸気候と同じです。

大陸の内陸は、海からはなれているので、上空の水蒸気の量が少なく、晴れる日が多くなっています。昼間は、太陽からの熱をたくさん受け、夜は、地表から熱がにげて温度が低くなります。

水は暖まりにくく、冷めにくい性質をもっていますが、土や岩石などは水に比べて、暖まりやすく、冷めやすい性質をもっています。

このようなわけで、夏は、海岸の近くに比べて、内陸のほうが、太陽の熱で強く暖められて気温が高くなります。それに、空気が乾燥しているので、雨が少なくなります。また、冬は、海岸の近くに比べて、気温はたいへん低くなります。

海洋性気候とのちがい

日本のように、四方を海に囲まれている所は、海の気象の影響を大きく受けます。昼と夜の気温の差は、わりあい小さく、雨がよく降ります。また、夏と冬の気温の差は、内陸性気候よりも小さくなっています。このような気候を、海洋性気候といいます。

海洋性気候が、内陸性気候に比べて、雨が多く、気温の差が小さいのは、海の水の影響を受けるためです。（監修・村山 貢司）

